

C-17 顔面および頸の形態的因子と衿型との関係についての研究(第5報)

名古屋女大家政 ○橋原ヨミエ 高部美保 加藤よし己

目的 着衣着体である人体と衿型との適合関係についての評価は、従来、経験にたより、或は個人的好み判断のもとに行なうなど合理性に欠けるきらいがあると思われる。そこで本研究では、先づ顔面および頸の形態と衿型との関係を審美面から追求し、理論的な裏付けを目指し、被服構成における教育指導の場に役立てたいと考えている。

方法 本学短期大学生235名を被験者とし、第2報、第3報で顔面および頸の類型化を試みて報告したか、顔面では円・だ円・卵・逆卵・角・菱の6種類の類型について、頸では25種類の中から代表的な5種類をとりあげ、顔と頸とを組み合わせた第4報と同一の資料を用い、今回はV字型4種類、角型4種類の衿型との適合関係について官能検査を行なった。検査者は被服教師10名とし、3～5日おきに5回の繰りかえし検査を行なった。その結果を分散分析し、分散比および寄与率を求め、顔型・頸型・衿型別の適合関係について検討した。

結果 1. 分散分析の結果では、顔型・頸型・衿型ともに1%の危険率で有意差が認められた。2. 6種類の顔型とV字・角の各衿型を組み合わせた場合に適合度か大の傾向を示したのは卵型であり、小の傾向であったのは角の顔型であった。3. 5種類の頸型の中で適合度か大の傾向であったのはV-4の頸型であり、小の傾向であったのはIV-5の頸型であった。4. 4種類の衿型の中で適合度か大の傾向を示したのは、V字型では頸高差から6cm下の衿型であり、小の傾向を示したのは2cm下の衿型であった。また角型の場合に大であったのは2cm下の衿型であり、小であったのは6cm下の衿型であった。